

特集

親鸞

「悠久の大地」に抱かれて知った「男の幸福」

心を高く悟りて俗に還る

俳優

森繁久彌

親譲りの財産を一切失くした森繁久彌は、決意も新たにNHKアナウンサーとして満州へ渡る。人の三倍は働き、五回ほど

死にそうな危険に遭いながらも、昭和二年一〇月、佐世保の土を踏んだ。森繁はこのとき思った——「今の俺には、

かぼそくも生きる腕があるぞ」と。芸能生活五〇年、この十一月には文化功労者に選ばれた森繁が語る「わが人生」……。

父の膝の温もりを知らず

親鸞教徒でもなければ、浄土真宗の信者でもなく、ともかく特定の宗派に属したことのない私は、信仰ということ突き詰めて考えたことがありません。「三相應」という言葉はもとも仏教用語のようですが、「時」「所」「人」の三つの因果が結ばれてこそ初めて「結果」が出るという意味でしょう。

仏法に篤い方々が、私の人生で得たことをお読みになれば、それが親鸞聖人の遺された『教行信証』や『歎異抄』の世界に通ずるところが、あるいはあるかもしれません。そう願って話を進めることにします。

臥薪嘗胆、田舎に生まれ育ち、笈を負って山坂を越え、困苦の中から自分を見出していくというような田中角栄ふうなことならば、面白くなおかつ感動を呼ぶと思うのですが、残念なことに、割に潤沢な家庭で、オンパレードで育ったドラ息子なのが、話としてまったくゾツとしません。

かつて徳川夢声老が健在の頃、どこかの楽屋で、「君の父君は、いくつの頃に君をつくられたのか」

「恥かきつ子じゃありませんが、五十過ぎての子です」「いや、それはたいしたもんだ。晩年の子はおおむね、良い子が出来るんだよ」

「どういうことでしょうか」

「弱い精子はなくなつて、よほど強いが残つとるから、つまり上質の種子の子だ」

「じゃ、徳川さんは？」

「わたしや、その点ダメだ。二十歳前の子だから、一ペんに四億近くもの……いや、どれがツイタか知れたもんじゃない」

「……なるほど」

「でも、まんざら馬鹿にもできんのだよ。わたしとて、

四億の先頭を切ってきた男だからね」

なんのことはない、夢声さんは最後のところが言いたかったので、私を引っかけたのかもしれないが、いずれにしても父は私を五三歳の時にこしらえて、大正四年五月三日、私の満二歳の誕生日の一日前に逝ってしまったのです。

父・普沼達吉——文久元年（明治より三つ遡った年号）江戸に生まれ、父（つまり私の祖父）の泰次郎は幕府大目付

役でした。明治三年、叔父（つまり祖父の弟）の成島柳北は浅草本願寺に啓蒙義塾を開くが、達吉はここに入って英語と漢学を修めました。そして東京帝国大学を出ると仙台一高の英語教授となり、三七歳の時には二高を辞めて日本銀行へ入り、その後、大阪に下つて市の助役から大阪電燈（現・関西電力）の常務取締役となって五五歳で他界してしまったのです。

言うなれば、私は父の膝の温もりを知りません。兄弟は七人でした。先妻との間に二男二女、そして私の母に三人の男の児があり、母はどういうことからか入籍してもらえずして、私たち三人は庶子と膳本にうたわわれています。つまり平たく言えば、私生子ということですが。

ああ青春の日々よ

その後の私の履歴書は、次のようになります。

大正一五年 大阪府立北野中学に入る。数学、物理を除いたほかは成績かんばしからず。模型科学に凝って、学問定まらず、家庭教師、手を焼く。

昭和四年 理由なき『暗記モノ』に反逆し、歴史の試験に白紙を投じ、もう一年間、三年生をやることになる。



昭和六年 一年損をしたことに気づき、四年生を終える
や第一早稲田高等学院文科に入る。理工科を所望する
も、側近、頭脳と照らし合わせ、これを断念せしむ。

今にしても残念。あの時、道をあやまたずんば、湯川
秀樹博士の如くなりたるものを。
昭和八年 早稲田高等学院にて人気フットウす。新宿の

易者、姓名を判断して、これ以上の不運なる運命なし、
姓名を変更せよと言う。大いに怒り、しからは今日よ
り運命にさからうぞとキモに銘ず。

ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」は上演800回を超え、日本演劇史上における金字塔となった。

提供・東宝

昭和一〇年 早大一年、由緒深き早大演劇研究部をリードす。その頃、東京女子大の一学生との芸術的共感、恋愛となり、ついに劇研よりボーイコットをくらう。全員惚れていたためのシットならんと今も思っている。その一学生とは現女房なり。

脱退組にて人間座を創り、築地小劇場にオニールの「アンナ・クリステイ」などを上演す。おやじの遺産、ゾクゾクと投資さる。学問のほうはフィアンセ(勝手にきめる)に任せ、彼女の活躍によって、試験は好成績なり。

この年の夏、ついに彼女の里父は官吏なりし、台湾に単身乗り込み結婚を申し込む。人これ呼んで駆け落ちと言う。誤り伝えるべからず。

そして暮れ、かくほどに芝居が好きならばと、親戚つどい、東宝に入れる。役者に絶対なりませんの一札を入れるための成果なり。裏口入社の社員、誕生す。

昭和十一年 藤山一郎、渡辺はま子両氏のアトラクションに、おがみ倒して出してもらふ。髭をつけ、衣装をまとい、かたわら太道具を運び、うれしき限りなり。面白がついていろいろ滑稽をやるも、人笑わず。ついに東宝新劇団へもぐりこむ。

だが、新劇団が解散したため、東宝劇団歌舞伎に入る。まもなく大部屋から私の姿がなくなる頃、この劇団も解散したのである。

ある日、看板に新しい配役を見に行くと、馬とあり、金子洋文作「ふるさと」の一幕に、窓から顔を出す馬の片足となる。芸術にあこがれる人間が、なぜ畜生をやらねばならぬか、大いに憤慨す。これを動機にロッパ一座に転座する。

学校は軍事教練ますます厳しくなり、時に商学部三年なり。簿記も知らず、貿易も知らず、商学全然我になし。文学部の教授は、文学部学生とのみ思ふ。「オイッチニ」は、殊のほか嫌いだし、この辺が潮とサッサと退学届を出して、アルバイト学生はここに金ボタン

を脱ぐ。

昭和十二年頃 二・二六事件による株の暴落に、残り少なき全遺産すつとんで跡かたもなし。

祖母と母と、黙認の妻杏子と、家財、名品ことごとく売りつくし、質屋七軒の質草、眼前の濁流を見るごとく一切を流す。一家一同、初めて未経験のどん底に達着す。時に愛妻は一子を宿す。その腹、とみに太まり、いとおしく、人生の微妙胸に痛し。

七月、中耳炎悪化し、順天堂病院に入る。約二カ月。この入院費は誰が支払いしや未だ知らず。女房のエラサ、この辺りよりボツボツ発揮され始めたか。

九死に一生を得て、ロッパ一座に帰れば、八月、召集令状舞いこむ。親戚一同あわてて、明治神宮神前に晴れて結婚を許す。うれしく、悲しく、これからの流離の身を嘆じて、痛飲の日々は流れ、嵐の夜、劇団一同の華やかな歓送の裡に東京を離れ、丹波は篠山の聯隊の門をくぐる。

内耳炎に酒は禁物。一年禁酒を命ぜられたるも、禁をおかして飲みつくしたお陰で、軍医、耳をのぞくやいなや「即日帰郷」となる。餞別、多分にあり、有馬山、いなさのささはらの温泉郷に足をのばして一週間。ついに搜索願いにより、東京に呼びもどさる。ロッパ一座を辞す。

「有望なる男よ、なぜやめるか」と、ロッパ師問う。「山にこもりて、にわとりを飼う所存」と答ふ。

昭和十四年一月 NHKアナウンサーの試験をひやかしのつもりで受く。三回、四回、五回、落伍せず。六回目、日の口頭試験に残るもの九〇〇人中五〇人、ついに三〇名採用の中に入り、外地へ高飛びとシャレで満州におもむく。

これ、森繁久彌 人間確立の第一歩なり。

人の三倍働いてやろう

こうして私は満州に行くことになるわけですが、赴任

するにあたって三つの指針(テーゼ)を持とうと心に言いかけました。

その一は、何でもいから文句を言わず、人の三倍働いてやろう。

その二は、今からでも遅くはない、できるだけ勉強をして、無為に流れた青春の日々を取り返そう。

その三は、一切の過去を、良かれ悪しかれひっくるめて忘却の淵に捨て去ろう。

おやじが遺してくれた財産をスッカラカンにしてしまった私は、この満州という地で、自分がこれから生きて行くうえでの力をつけたいと思いました。

もつと言えば、親がくれたのは財産ではなかった。あれは淪落に陥るための良い匂いのするミミズだった。それをパクツと食べてしまったものだから、針を外すのにたいへんに困ってしまった……そんな気がしたので、今度は人の三倍働かないと、自分はもう二六歳だし取り返しがつかない、と覚悟を決めたのでした。

当時、全満には二三個所に放送局がありましたが、私はYという男と二人で、新京の中央放送局に残ることにしました。しかし、Yと私とでは、仕事に対する考え方がまるで違います。

Yは、冬が来ると、こんなクソ寒い所はかなわんとか、何で映画が見られないんだとか、竹葉亭の鰻が食いたいとか、ことごとく文句ばかり言っている。つまり、Yの生活のテーマは五感にしかない。目に触れるもの、口に味わうもの、皮膚に触れるものと五感にだけ生活の視点を置いているものだから、不平タラタラということになった。

私は、三つの指針を持とうと言いきかせていたので、Yとは逆で、ことごとく嬉しかったのです。お前に住宅を貸してやると言い、月給をくれると言い、しかも外地手当までついた。大連は五割増し、奉天は七割増し、クソ寒い新京は九割増しです。しかも放送局も私にくれて、聴取者もつけてくれた。

Yは「お前と俺とは考え方がまったく違うな」とよく言っていました。考え方を少しひねれば、ありがたいと思えるのではないのでしょうか。

人の三倍は働いてやろうというのですから、これはたいへんでした。歴史を勉強しなきゃならない。五四運動も知らないのかと言われたら悔しいから勉強する。今と違って、アナウンサーは自分で原稿を書いたので、文章も勉強しなくちゃならない。

マイクロホンの勉強もしました。マイクロホンにはどういう種類があって、スタジオの残響はどうか、などとやっていると寝る暇が惜しいし、なくなってくる。

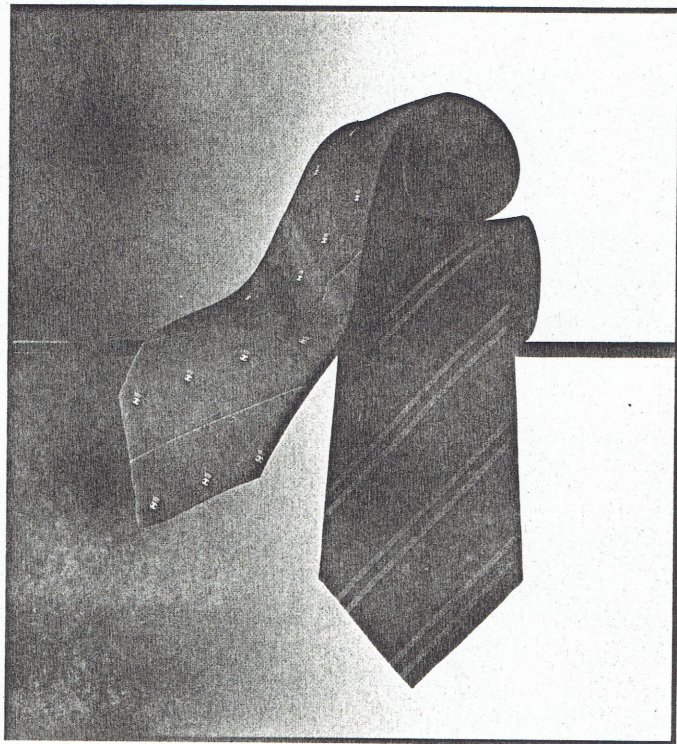
二年間ほどアナウンサーをやった頃、ドイツからテレフンケン会社のディスク式録音機が入ってきた。これは今のようなテープ式の小さなものではなく、冷蔵庫の半分ほどあるバカ重いヤツで、移動には不向きなもののように思われましたが、私はノモンハンまで担いで行っただけです。

また、この機械は「満州人文地理」という番組でも大いに役立ちました。これは、全満各地をレポートする内容でしたが、しまいには技術担当の志望者がいなくなりました。持ち歩くと言えは格好はいいが、天秤棒で二人が担ぎ、これに加えて一〇キロ近い発電機を持ってあちこち行く。「あいつと一緒にいると殺される」なんて言うヤツもいました。この番組は私の宝になりました。これがあるために、二年で転勤するはずだった新京に、終戦までいることになったのです。あいつを転勤させるとわからなくなる、という理由からだったようです。

人生とはミラーボールよ

それから、「大地は万巻の書なり」と痛感もしました。ホロンバイルの草原などに行くと、トラックで三日走っても家がありません。あまりの広さに仰天しながら草原に寝転がって、悠久の大地に抱かれながら考えていると、人間というのはなんと卑小なものだろうと感じたもの

CHANEL



CHANEL

CRAVATES

シャネルのお求めは次のブティックで…

東京/インペリアルプラザ(帝国ホテル)・伊勢丹(新宿)・西武(池袋)・高島屋(日本橋)・三越(日本橋) 横浜/横浜高島屋 名古屋/松坂屋(本店) 京都/高島屋 大阪/高島屋・大丸・阪急 神戸/大丸 広島/福屋 福岡/大丸(天神)

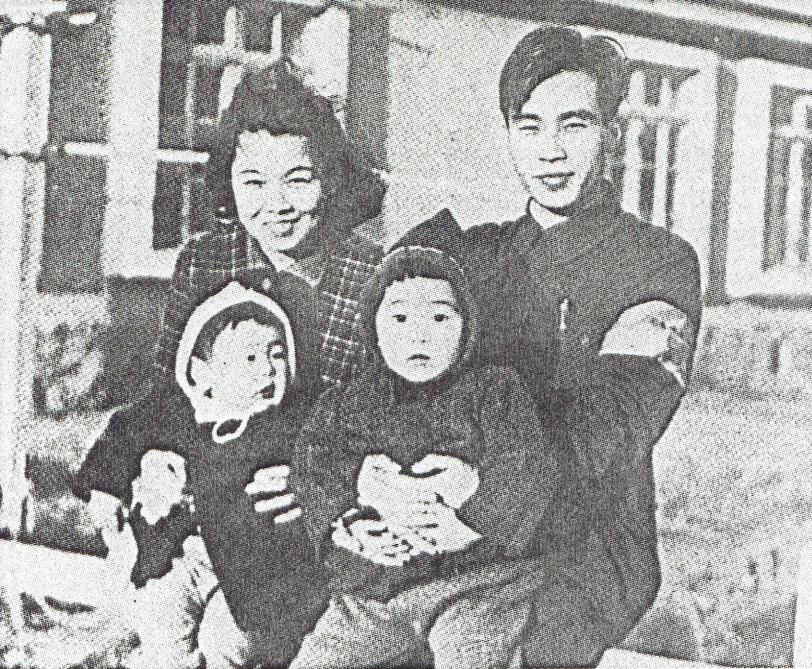
です。
あの大地に抱かれながら、チェーホフやゴーリキーを読み直してみると、島国の日本で読んでいたものとはまるで違った本を読んでいるのではないか、と思えてくるのです。

たとえば、幸福とは何だということ一つ取っても、追求している土台そのものが大違いに感じられるのです。産婆さんと呼びに行くにしたって、馬に乗って二、三日かかるという距離感ですから。

五回ほど本当にもうこれはダメだ、というよつな危険に遭いながらも、終戦になりました。日本が戦争に負け

たとたん、「これだけのお金、危ない中で一生懸命に貯めたこのお金がパーになるんですよッ！」なんて金切り声をあげている人がいました。しかし、私は、「今度は俺には腕があるぞ」と思った。私はパーになっていない、かばそくも生きるといふことの「自信」がありました。

昭和二十一年一〇月二日、DDTに白くまみれた一家六人は、佐世保の土を踏みました。体の弱い母、七つに五つに三つの三人の子供、そして私たち夫妻。世が世なれば晴着で飾ってお祝いする年頃で、数寄屋橋の上に並べて座らせたら、放り銭は間違いないただけの格好でした。



満州赴任直前に生まれた長女(右)に続いて、長男も生まれた森繁一家。

大陸のト真ン中(新京)で生まれた子供たちは初めて見る海に、「あつ、パパ、すごい池ノ」と奇異の眼を見張りました。この子らを脇に見ながら、戦後の自分は、人には嘘をついても、二度と己れには嘘はつくまいと心に決めたのです。

人生には、二度や三度はチャンスが来ます。いたずらに焦っても、運は向こうから来るもので、ただ眼をふさいでいては見損なうことがあるということです。

耐えたつてちつとも認めてくれませんよ、と言う若い人がいる。なんでそんなに早く認められたんだ、どうして認められるということとをそれほど望むんだ、と私は逆に聞きたい。

ダンスホールにミラーボールというのがぶら下がっています。私は「人生とはミラーボールよ」と言いたいのです。

つまり、人間のことを「あいつも年を取って丸くなっ

たね」なんてよく言うが、人間というのは丸くはならない。角だらけだ。初めは八角形だったものが、年とともに一つの大きな角が削られて三つなり四つの角にこまかく増える。これだと、近くから見れば角だらけだが、遠くから見ると丸い、と感じる。それが、あのミラーボールで、全部の人々にピカピカと光って見える必要なんではないのです。ある一面がピカッと光って、「あつ俺に光が当たった」とか「僕には当たらなかった」ということになる。当たる人と当たらない人が出てくるのが、ミラーボールです。

芸なら芸、仕事なら仕事で、何か一つのことに一生懸命になってみる。どれか一つの面を一生懸命に磨いていけば、必ずやピカツという光が誰かに届くはずですよ。

フルトベングラーに『音楽ノート』という本がありますが、その中でこの大指揮者は「単純なことができる人間は、最も偉大な人間である」と喝破しています。芝居の上でも、会社という組織の上でも、人生を生きていく上でも、大事な処世の哲学のように思えるのです。

その単純なことができる人間に、最近、出会いました。若い人だが、実に素晴らしい話を聞かせてくれました。

マリアナの大惨事

ある日、ヨットで、私の好きな伊豆をぐるっと回って西伊豆の戸田港へ入った。ここはすごく好きな港です。ずうっと松並木の堤防があつて、富士山が倒れんばかりに迫ってくる。「田子の浦 倒れんばかりの 夏の富士」と私は詠みました。

そこに停泊して、ヨットの上で休んでいたら、若い男が舟を漕いでやって来て、私のほうを見上げながら、「森繁さんでしょうか? そうでしょうか?」

と声をかけてきた。

「ああ、そうだよ。土地の人かい?」

「ええ……僕、今夜、お話に来ていいですか?」

青年は夜になるとやって来ました。

「よし、ひとつ取って置ききの酒を抜いてやろう」

「いただきます」

その夜は、満天の星でした。いろいろな話をしているうちに、青年が、

「森繁さん、マリアナの大惨事というのをご存じですか? マリアナ諸島って、魚のよく捕れる所なんです」

「そう言えば四、五年前に新聞で読んだような気がするけどねえ……」

「実は、あの惨事は全部が戸田の漁師だったんです」

青年は、静かに話し始めてくれました。

戸田の漁師が百何十杯もの漁船を操ってマリアナ沖で魚を捕っていた。気象通報に彼らは最も神経を使うが、台風はマリアナ沖を通過しないということだったのです。

ところが、気象通報のほうの間違っていた。台風はまともに漁船団を襲ったのです。あつという間に四分の三ほどの船が木の葉のようにひっくり返り、この青年の乗る船も転覆しました。

当時一六歳だった青年は、船に揚がってきたマグロの腹を割いてはデッキブラシで洗い、これを倉庫に詰めるのが仕事でした。その日も同じように作業をしている最中に、時化てきたなあと思つたらまもなく、ドォーッと巨大な波が襲つて来て海中へ放り出されたのです。

気がつくと、青年は木切れに必死でつかまっています。二〇分ぐらまで自分の体が上がるかと思うと、スーッと今度は体が落ちていく。息を吸っては海の中に潜り、潜ってはまた体が持ち上がるのを待ちました。

「くそっ、死んでたまるか!」

青年は、その木切れだけは手放すまいと力いっぱい抱きかかえました。そのうち、すっかり酔ってしまつてゲージと吐いた。

翌朝、気がついてみると、昨夜の台風がウソのように海原は実に穏やかだ。青年は、木切れにつかまって浮い

ていたのです。

「早く船が見えないか！ 早く見つけてほしい」

そう願ってはみたものの、夜になっても一艘の船も通りません。次の日の朝がきて、昼になりました。

もう限界だと眠くなりかけたとき、目の前を船が通る。

青年はありったけの声を張り上げて叫びました。

「おい、助けてくれーい！」

青年は助け上げられました。デッキの上でメチャクチャに吐かされて、二時間ほど寝たのでしょうか、ふと目が覚めてあたりを見回してみると、死体でいっぱいです。

ピカッと光るもの

青年は、呆然とあの台風の夜からのことを思い出し始めて、ハッと自分の足元や後ろを見ました。

「ない！ 木切れがない」

青年は、船長のところへ飛んで行って、

「俺がつかまっていた木切れ、どうなったでしょうか？」と聞きました。

「木切れ？ そんなもん知らんよ。お前、体が上がっただけでも喜べ、馬鹿者」

と怒られた。

ところが、青年はどうしても木切れが欲しくなり、また。そこで船長の足にしがみついて、

「すいません、あそこに戻ってください。俺を助けた所に戻ってください。木切れを探しに行きたいんです」と訴えます。船長は当然のこと、

「太平洋のド真ん中へ帰って、木切れが見つかるわけがないだろ。そんなことはできん」

と突っぱねた。それから三時間たち、四時間たったが青年は船長の足にしがみついてなおも頼む。

「船長、あれがだんだん欲しくなるんです。どうしても探したいんです、船長！」

「……お前も一六なのにな、本当に偉い。よし、引き返してやる、戻ってやるよ」

帰ってやると答えた船長もなかなかの人物です。四時間来たところを引き返すということは、八時間かかって太平洋のド真ん中に戻るといことです。

さっきの所まで来たとき、船長は、

「おい坊主、お前が気のすむまで探せ」

と言うなり、サーチライトをつけさせました。夜の海面にサーチライトの光が走ります。三〇分、四〇分……あっちへ回り、こっちへ回っているうちに、一つのサーチライトにピカッと光るものがありました。反射するということは、そこに何かがあるということです。

「あれは船長、何でしょう」

「ふむ、船をそっちへ回せ」

船は光りを帯びたもののほうへ近づいていきました。すると、それは筏*いかだ*だったのです。

青年は、私にこう言ってくれました。

「森繁さん、木切れは見つからなかったけど、その筏には息も絶え絶えの六人の漁師が乗っかっていたんです。私は仏様が存在するということを認めます」

木切れに執着するところに、青年の想念や思念を超越したものがあります。これは理屈ではない。そして、この青年の執着に感動して「よし、戻ってやろう」と言った船長もまた超越した世界を持っている。普通の人間の判断からすれば、実に馬鹿らしいことでも、船長はこれに乗ったところが偉い。

今は二一歳になったその青年は、戸田と沼津との間で、お客さんを運ぶための小さなポンポン船の船長をやっているということでした。

人師は遣い難し

この青年からも、漁船の船長からも、実に多くのことを私は教えられました。中国の言葉に、

経師けいしは遣い易く

人師にんしは遣い難し

というものがあります。まさに、それです。

かつて新京にいた時、我が家にスーチン（淑謹）という手伝いがいました。昭和十五年、スーチンはまだ一三歳でした。三年間に三〇円を親に払い、小遣いは別に毎月なにがしかを本人に渡すのですが、当時、私の給料は八〇円でしたから、およそ三〇円の見当はつくでしょう。

小さな村に生まれ、そこで育ったこの娘は、もちろんその村以外は見たこともなく、学校にも行っていません。四平街の駅まで迎えに出た私を、人の好きそうな父親に手を引かれ、わけもわからず連れて来られたスーチンは、泣きはらした眼をうつろにして、横眼で見ました。

父親と娘を安心させようと、私は親切に我が家のことを説明しましたが、一向に聞く気配もなく、しきりにピ―（女郎）にマイマイ（売る）はプッシン（駄目だ）と念を押すばかりです。なるほどこうして田舎の娘が売られていったのか——と、ふと日本の東北を思い、いずれの国も大差のないこの悲劇を駅頭の風の中で感じました。

病院の検査も終わり、健康状態も良いと報らされたので、スーチンを、それからは子供たちと一緒に寝起きするようにさせたが、自分の妹や弟たちを思い出すのか、私たちが驚くほど彼女は子煩悩で、いつとはなしに子供たちとも馴れて、時折、可憐な笑顔がのぞけるようになりました。

ある日、私が休みの日で家の中でゴロゴロしていると、窓下で子供たちの声がする。何をしているのかとそっと覗くと、近所の子供たちとマゴトをしています。その横にスーチンは静かに座って、仲間入りをするでもなく楽しげに見ていましたが、突然、彼女が怒りだしたのです。初めて見るスーチンの姿です。

「イズミちゃん、プッシン（不好）わるいノこと。イズミちゃん、あやまりなさい！」

彼女の叱声は、いかにも当然でした。長男の泉が、

「ごめんなさい」と、隣の子にあやまっているのを見て、私はぐっと胸の迫る思いがしたものです。それはまったく良き姉であ

り、先生であり、あるいは親の代理でもあったのです。

私は元来スパルタ式で子供を教育していました。ときには大声を発し、尻をひんむいて、二、三度ブツことも再三でした。私の機嫌が悪くなったと察するや、彼女は子供たちを抱いて、台所のお菓子をつとところに（これは子供たちと均等に分けてやるオヤツだ）、近所の公園へ飛んで行ってしまふのです。道路へ自動車を見に行っても、決して子供を手から放しません。家内が買物に連れて行くときも、三尺下がって女房の影を踏まない距離で歩いて来るのですが、一三、四歳の少女に一体誰が教えたのでしょうか。見方によっては、無教育というが高い文化が血の中にあるにちがいないのです。そこに連綿として流れる中国人の生活文化が、何の不自然さもなく息づいているのでしょうか。

子供が入院したとき、スーチンは病室で親よりもはるかに確実に看護に当たり、本人も些か瘦せて退院してきた姿に、私たちは何度頭の下がる思いをしたことでしょうか。

中国残留孤児たちが、やっと肉親に逢えて言葉も通じぬままに泣きぐずれている姿を見ながら、私ももらい泣きをしました。あの当時、満州の農家はすべてが裕福であったとは言えない。この子をお願いします——と、疲れ切った異国の人間に頼まれて、一人でも食いブチを削ろうと思っているその農家は、一様に歓迎したのだろうか。私の経験ではそうは思えない。かつての日本の農村と同じ悶着があったらうが、結局は、彼らはその子を引き取ったのです。

もちろん、中には種々の迫害を受けた子供たちもいたでしょうが、いずれにしても成人して嫁を貰い、子供を産んでいる。決して女郎には売られなかったのです。

こんなことが、もし立場を変えて日本にあったら、果たしてあのようにしたでしょうか。ふと昔の日本の混血児たちの、血のにじむような侮蔑の中で育った話を思い出さずにはいられません。

結局。文字は、
自分なんだ。

書くことは、自分自身を語ること。文字は、人そのものです。

書くことを大切に人の、シェaffer。

たどってきた足跡を筆跡に映して、生き生きとあなた自身を語ります。

安定した書き味を誇る、一体成型ペン先の万年筆。

そして、シェafferのすべてに共通する洗練されたスタイル。

世界中の人たちに愛されている、書くための高級筆記具です。

人生という旅の、良き伴侶。あなた自身を雄弁にするために、シェaffer。

シェaffer-クルガ1005/万年筆25,000円、スリム万年筆25,000円
ボールペン12,000円、シャープペンシル12,000円、スリムローリング14,000円



SHEAFFER

SHEAFFER PEN TEXTION

日本総代理店 Jaffer セーラー万年筆株式会社

人は等しく深い愛を口にするが、やはり中国人は、どこか私たちとは違うようです。心が広いと言では言ってしまうぬ大地に育まれたスケールの大きさがありません。加えて深い人間的な情愛がなくて、この子たちがあんなに成長するはずはなかったでしょう。

まさに、人師は遭い難し、です。

晴天の友となるなかれ

私は、会社というところはよくわかりませんが、劇団というところはよくわかっています。劇団という組織は、人と人との集まりで結成されているのであって、主役と

か脇役とかと、その中の幾人かが引っ張れるものではありません。固まりの力でやらなければ、とてもじゃないが芝居などできないのです。

私の好きな言葉に「晴天の友となるなかれ」というのがあります。劇団でも会社でも、晴天の者もいれば、曇天の者もいる。

同窓会などやると、晴天の者は曇天なんか知らん顔でワイワイガヤガヤとやっている。二次会に行くにも晴天の者ばかりで繰り出す。世の中のこういった一時的な浮沈をやたらと気にする者がいます。

会社でも、なんとなく見渡してみると、「あの野郎、曇

文化功労者に選ばれて喜びを句に託す(10月23日)。



読売新聞

歴史を学べばわかるように、人間は過去においていろいろな苦しみの中から幾つもの時代を経て今日につながっている、ということ

紙で返したことを先に述べましたが、この本を読んだとき、こうやって歴史を見れば、たしかに面白いものだと思つたものです。その赤木健介が、近代史の部で「濁流に泳ぐ」という一文を書いています。それは、次のような内容でした。

七十一歳の私に、文化功労者という素晴らしい添え木をしていただいたのだから、花を一輪でも二輪でも咲かせることが、後輩により大きな道が開けることにつながるのだ、と肝に銘じています。(文責・編集部) ▲

散りそふな 花に添え木の 菊の宴

天だなあ」という者がいる。かと思えば、賢しらな、それこそ目から鼻に抜けるような者もいる。上に立つ者はどうしても、こういうタイプを重宝がってしまふものです。だが、これが落とし穴となるのです。その人間の本質はどうなのか、ということを見抜いていないと、それが大成するのを見失ってしまうからです。

人間というのは、富んでいようが、貧しかろうが憐れなものではないでしょうか。そいつがドテラを着てヌクヌクとしていようが、こつちの者が薄いペラペラの浴衣で震えていようが、人間の本質には関係がない。

海老折れ寝 寒夜のふぐり 悲しけれ

という俳句があります。寒い夜にキントマを抱いて海老のように丸くなって折れて寝ている。しかし、この俳句をじっと見ていると、こいつはどのくらい熱烈な情熱を内に燃やしているのかなあ、と思えてくるのです。どこか、ただいたずらに寒さに震えている人間ではないような気がしてくるのです。

これに対して、ドテラを着込んでいるほうは、一見豊かなようでいて、内心はいつ警察に踏み込まれるかと思つて戦々兢兢としているかもしれません。

私は、常に平原のようでありたいと思っています。自分分は富んでもいなければ、貧しくもない。

自分はゼロのところで生きて行きたい——つまり、プラスもなく、マイナスもなく、ゼロの観点で人に対して物を言いたい。そうでない、自分を見失う。ちよつとも人の上にいるような態度で事に当たると、その己惚れが忌まわしい闘争になったり、欲望に変化したりするのです。これでは人はついてきません。

親鸞は「そらごとたわごと まことあることなし」と言つたそうですが、人間が生きて行くうえで織りなす悲劇や喜劇は、憐れなものだということでしょう。

芭蕉は、こんなことを言っています。

心を高く悟りて俗に還れ

私は「俗」という言葉が好きです。何でも体当たりでやつて、いろいろな経験をする。聖人君子面をしていても何もならない。高く悟つたあとで俗に還つてこそ、人間世界が見えてくるのではないのでしょうか。

川上に向きて濁流を渡る

昔、赤木健介という少し左翼がかった歴史家の著した本に「日本史入門」というものがありました。とても書き方が面白くて、たとえば、応仁の乱の時に世界各国はどうなっていたか、ということを書いていました。私は歴史が嫌いで、学校の暗記モノに反逆して試験用紙を白紙で返したことを先に述べましたが、この本を読んだとき、こうやって歴史を見れば、たしかに面白いものだと思つたものです。その赤木健介が、近代史の部で「濁流に泳ぐ」という一文を書いています。それは、次のような内容でした。

が読者の皆さんにはわかつていただけたと思う。あなたがばかりが今日、一番悪い世の中に生まれたとか、こんな悲惨な巡り合わせだとか思い込むのは、大きな誤りである。人は、その祖先において、全部それをくぐつて来たのだ、と書いてあつたのです。

つまり、われわれは過去において濁流に泳いできたのだから、時代が悪い、世の中が悪いなどと嘆いてないで、君たちも濁流に飛び込んで泳げ、というわけです。

いい言葉です。しかし、濁流を泳ぎ切るには、川下ばかり見ていると流されてしまふ。「あいつに貸した一〇万円、一体いつになったら返してくれるんだ」とか、「今度こそ手柄を立ててあいつに一泡吹かせてやる」とかに頭がいつていると、どんどんどんどん川下に流されて行くのです。

そんなことしないで、過ぎ去つた時間はもういい、パツと川上のほうを向いて、少々流れが強くてもじつと耐えていかなければダメだ、ということ为先人や歴史は示してくれているのです。

「百万人といえども我行かん」という荒々しいものが、私の中にはたしかにあります。親鸞という人は、そういう荒々しいものを何に転化したのでしょうか。信仰を以て、それを内へ内へと転化していったのでしょうか。

親鸞は、直江津の「鏡の池」に自分の顔を映し、「わが心は蛇蝎の如くなり」と言つたと聞きます。抑え切れない自分の煩惱に対して、その激しさを内観の世界へ向けて自分を厳しく見詰め続けた、ということでしょうか。

とても親鸞ほど自分を見詰め続けたとは言えませんが、私は人の三倍働き、人の三倍遊んだ、と言えるかもしれません。